

戦姫絶唱シンフォギア
～ Web Warrior ～

湯呑み茶碗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

別次元からのヴィランの襲来により、全ての人間の記憶から消え去ったピーター・パーカーことスパイダーマンは、普段通りニューヨークをスイングしながらパトロールをしていた。はずだった。

気づけば彼は縁もゆかりも無い地である東京のビルへと着地していた。

これは、六人のシンフォギア装者と一人のヒーローが紡ぐ、大いなる力と大いなる責任の物語

目次

New Home

| | |
|-----------|----|
| プロローグ | 1 |
| 出会い | 8 |
| ガングニールの少女 | 13 |
| 撃槍と蜘蛛 | 19 |
| 三重奏と蜘蛛 | 30 |
| 力と責任と | 38 |
| 終焉の名を持つもの | 43 |

New Home

プロローグ

やあ、僕はピーター・パーカー。

ミッドタウン高校に通う普通の高校生だった僕は、ある日見学に行った研究施設で放射能に汚染された蜘蛛に噛まれた事でスーパーパーパワーを手に入れた。

そこからは波乱の数年間だった。キャプテン・アメリカと戦ったり、クラスメイトのお父さんとも戦った。宇宙にも行ったし、別次元の自分と一緒に戦ったりもした。大切な人をたくさん喪って、友達の記憶からも消えた。

色んな経験を経て自分でも成長したと思うし、別次元の存在に驚いたりもしない……と思ってたんだけど。

「さすがにこれは予想外!？」

いつもみたいにニューヨークのクイーンズを飛び回ってたはずの僕は、気づけばまるで知らない土地にして、おかしな姿をしたエイリアンを相手にしている。

試しにウェブを放ってみただけ、ホログラムみたいになり抜けた。見た目だけで害は無いのかと思ったけど、触れられた人達が指パッチンの時みたいに砂になっていた。少

なくとも無害ってわけじゃなさそう。

とにかく、まずは逃げ遅れた人を助けるのが最優先。それと、『解析、及び最適化を開始します』

ウェブシューターを操作して、目の前の化け物について解析をする。スーツがハイテックで助かった。ナノテクノロジー様々だね。

なんで今ナノテクスーツを着てるのかは分からないけど、まあそれは後で考えよう。

「あー、君たち言葉は通じたりする?」

化け物に対して話しかけては見たものの特に反応はない。

「だよね。じゃあ君は僕の言葉分かる?」

瓦礫の中で震えてた女の子を見つけて話しかけてみる。

「ひっ……! お兄ちゃん誰?」

(日本語!?)

「あー、えと……ダイジョウブ」

とりあえず分かる範囲の日本語で話しかけてみる。

「ツカマツテ。ニゲルヨ」

「うん。お兄ちゃんもカッコイイお姉ちゃんと同じヒーロー?」

なんて? ヒーローって単語はとりあえず分かったけど……

「そうだよ。僕はスパイダーマン」

「スパイダーマン……?」

「じゃあしつかり捕まってる」

女の子を抱えて近くのビルにウェブをつける。小さい子だしあまり高くに行かないようにゆっくりスイングしよう。

「お兄ちゃんすごい！ おっきいブランコみたい！」

なんて言ってるのかは分からないけど怖がってはないみたいで良かった。

とりあえず、あのエイリアンのいない所に連れて行つてから、この子の保護者を探そう。

と、思ったならそれらしき人発見。こんな状況で逃げずになにか探し物って感じだ。

「あ、ママー！」

ビングゴ。女性の近くに着地して、女の子を降ろす。

「ママー！」

「良かった……！ 無事だったのね。そちらの、えっ……と、スーツの人。ありがとうございませ……！」

「お気になさらず。ところで奥さん英語分かります?」

「は、はい。人並みになら」

「おっけー。それならその子をしっかりと抱えて、離さないようにしててください。安全なところまで運びますから」

「は、はい」

「それじゃあ失礼」

二人を抱えて、思い切りジャンプする。

下で見てる限りだと大量に見えたあのエイリアンも、こうして上から見ると一部に集中してる。少し離れば大丈夫そうかな。

「この辺まで来れば平気かな」

「本当にありがとうございます。なんとお礼を言ったらいいか」

「気にしないでください。僕はさっきの場所に戻りますから、お子さんを連れて逃げてください」

「わかりました。あ、えとなんとお呼びすれば良いか」

「僕は親愛なる隣人、スパイダーマン。それじゃあ」

「ありがとうございます！ スパイダーマンさん！」

お礼の声を背にさつきまでエイリアンが集まった場所に向けてスイングを始める。

さんは日本語の敬称だっけ？　なんかスパイダーマンサン……なんか変な感じの呼

び方だな。

『解析完了』

「ナイスタイミング」

AIからの報告と同時に視界にあのエイリアンに関する情報が表示される。

「ノイズ。あのエイリアンそんな名前なのか」

どうやら、あのノイズとかいうエイリアンは、現実存在する比率をいじって、接触可能な状態と通り抜ける状態を好きに変えられるらしい。

こっちからは触れないけど、向こうからは触られるって話になるのか。現状の対処法は、一定時間で炭素化するから逃げながらそれを待つしかない。

「あれが触ろうとするタイミングに合わせたカウンターは？」

『ノイズの接触タイミングに合わせた攻撃猶予時間は0.02秒となります』

……無理だなあ。

「今のところアレに攻撃できる手段はある？」

『スーツの最適化により四肢を使った攻撃が可能。ウェブによる干渉不可となっています』

なるほどね。ウェブで拘束するのが無理だけどスーツそのものでなら攻撃可能なのか。そういう事なら

「瞬殺コマンドを実行！」

あの時の決戦と同じように、ノイズの集団の真ん中に着地して瞬殺コマンドを実行する。

実行と同時に4本のアームが周りのノイズに攻撃していく。

「炭素化……こいつらもさっきの人達みたいに消えていくのか」

粉状になって消えていくのを見るとなんだか、あの時の指パッチンを思い出すなあ……

「Balwisyall Nescell gungnir tron」

「Killter Ichai val tron」

なんだ？ 歌？ どこから……女の子!? まだ逃げ遅れてる子がいたのか！

いや、アレは……アーマー？ さっきの女の子が言ったヒーローってのはあの子たちの事か！

とりあえず、こつちを片付けてからあの子達と合流しよう。

「クリスちゃん！ ほら、やっぱりCGでも幻覚でもなかったよ！」

「なんもん見たらわかる！ なんなんだアイツは!？」

「少なくとも街の人たちを助けてたし、きっと私達の味方だよ！」

ピーターがノイズの相手をしてる間に現場に到着した2人の少女が彼を驚きの表情で見つめていた。

「とにかく、コイツらを片付けない事には話も聞けやしねえ！ やるぞー！」

「うんー！」

彼女達は立花響と雪音クリス。ノイズに対して唯一の対抗手段とされている装備「シンフォギア」の装者である。

「歌いながら戦ってる……？」

戦闘を始めた二人を見て、再度スーツに解析を要請するピーター。

「きつと何か意味があるんだろうな。BGMがあると盛り上がっていい、ねー！」

これで終わりと言わんばかりに目の前のノイズにパンチをお見舞いし、瞬殺コマンドを停止させる。

『日本政府のデータベースに情報あり』

視界に再度情報が表示される。

「シンフォギア。あの歌で出力を上げてるのか」

一通り彼女達の使用するギアの概要を確認したところで加勢しようとうエブを飛ばして彼女達の方へ向かうピーター。

「細かい事は全部片付けてから聞こう」

出合い

一通り、周囲のノイズを片付けた後に、制服姿に戻った響の近くへと着地するピーター。

『やあ初めまして。僕はスパイダーマン』

「え、英語!? あー、えとー、あいどんとすぴーくいんぐりつしゅー」

声をかけられたものの英語の成績がいい訳でもない響、まともに会話になるわけがない。

(英語話せないのか……どうしよう)

「普段からちゃんと授業受けてないからだバカ」

そこにクリスが割って入る。

『で、お前は一体なんなんだ？ 少なくとも声を聞く限りじゃ女とは思えないし、そのスーツもシンフォギアには見えねえ』

『良かった。君は英語分かるんだね。僕はスパイダーマン、説明したいのは山々だけど、どこから話しているのやら』

『ああ、色々あってな。というかそうじゃなくてだなあ！ そのさつきから名乗ってる

スパイダーマンつてのも、漫画のヒーローじゃねえんだから名前を言えよ!』

『それは出来ないよ。色々あるけど、ヒーローの正体は秘密なのがお約束でしょ?』

それなりに多くの人物に正体をバラしてしまっていた事で大勢を巻き込む事態になった経験から、ピーターは今後誰にも正体は明かさないと決めていた。

とはいえ、それで納得させられるほど現実には甘くない。

『はいそうですね。つて納得するわけないだろ! 正体も明かさずにヒーロー気取りで、どこから持ってきたかも分からないスーツ着て戦つて、訳が分からないにも程があるだろ!』

『気持ちにはわかるけど、正体は明かせないよ。嫌な経験が多いんだ。とにかく、君達と敵対する気は無いから安心して。あの、ノイズとか言うのが人を襲うのを止めればいいんだよね?』

『待て、お前ノイズを知らないのか?! 世間知らずにもほどがあるぞ!!』

クリスがそう言った辺りで、周りを黒塗りの車に囲まれる。

『そこから先の話は本部で聞かせてもらいます。スパイダーマンさん。スーツはそのままで構いませんので』

車から降りてきた男性がピーターに声をかける。彼は緒川慎次。響やクリスの所属する特異災害対策機動部二課のエージェントである。

『あー、えと、はい。正体を明かさないうえなら、とりあえず着いていきます』

そう言つてスーツのまま車に乗り込むピーター。ハイテクスーツで車移動するスパイダーマン。きつと前まで知り合ひだった人達が見たら大笑いするだろうな。とピーターは思つた。

「な、何の話してたのクリスちゃん？」

完全に置いてけぼりになっていた響が、クリスに小声で話しかける。

「色々だ。とにかく、敵じゃないにしてもふざけたヤツだつてのは確かみたいだ」

響の質問に答えながら、ピーターとは別の車に乗り込む。

こうして、ノイズとの戦いを終えた三人を乗せた車は、本部へと向かうのであった。

『つまり、君は別の世界から来た人間で、そこにはノイズやシンフォギアは存在しなかったが、多くの超人が居たと』

場所は変わり、特異災害対策機動部二課本部。流暢な英語でピーターに聞き返すのは、風鳴弦十郎、この課の司令官である。

『まあ、大体そんな感じですよ』

本部に来てからピーターは、前の世界での事を一通り自分の名前や身内の名前をボカシつツ説明した。

『にわかには信じ難いが、ありえない話ではない、か。だがやはり、正体が分からない以上手放しで信じる訳にもいかん』

『だと思えます。自分でも無理な話だとはわかってるんですけど、信じてもらえないでしょうか』

そう言ったピーターの言葉に対して、少し考え込んだ後に、話を聞いていた響とクリスの方を向く。

「共に戦った君達はどう思う」

「へっ？ いやー、私にはそもそも何の話をしてたのかがさっぱりでー……あ、でも、ノイズに襲われそうになってた人を助けてたのは見てましたし、戦ってる間もずっと周りに逃げ遅れた人がいないか確認してるみたいでしたから、信用はしてもいいのかなって思います」

いきなり話を振られ驚いた様子の響だったが、ピーターの一連の行動から、敵対する可能性はないと考えているようだった。

「……正体を言いたくない理由は分かったし、アタシも別にこれ以上疑う気はねえよ」

ピーターの話への同情もあったのか、クリスもとりあえずは信じても良い。と考えていた。

『と、言うことだ』

『なんて言つてたのかさっぱりだったんですが……』

日本語が分からないピーターは響やクリスが何を言つてるのかが分からないため、幻十郎が翻訳する。

『少なくとも、君の行動で彼女達の信頼は得られている。ならば我々も君の言葉を信じる事にしよう』

『ありがとうございます。あー、えと、それで僕はこの後どうすれば……？』

『君の住まいはこちらで用意する。君が正体を明かしたくないという以上プライベートについてには保証しよう。そこは君にも我々を信頼してほしい』

若干不安を感じたピーターであったが、少し考えた後に返事をする。

『……はい、ありがとうございます』

楽天的な考えではあるが、彼らが監視カメラで正体を暴くような事をするような人達には見えなかった事や、家も無しに活動は出来ないと言う判断からだった。

かくして、ピーター・パーカーことスパイダーマンの特異災害対策機動部二課の所属が決定したのであった。

ガングニールの少女

僕がこの世界に来てから約2ヶ月。

スパイダーマンとしての生活をしながら、日本語の勉強を一通り進めて、日常会話程度なら問題なくできるようになった。

有難いことに、二課に所属している僕はそれなりにいい給料が貰えている。なので、お金の心配はせずにヒーロー活動と勉強に専念できた。

そして今日、同じく二課に所属している風鳴翼のアーティストとしてのライブがあるので、それを観に行くことになっている。ピーター・パーカーとして。

響やクリス達は関係者席で観るらしい。僕も一応関係者ではあるんだけど、関係者席に入るとなるとスーツを着てかないといけない。

さすがに目立ち過ぎるのでそれは出来ない、という事で個人で観に行くことになった。

「そろそろ時間かな」

私服の下に自作のスーツを着て、その上からナノテクスーツを装着する。

私服のまま家から出られないのは不便だけど、その程度は気にならないくらい良い生

活をさせてもらえてると思う。そもそも窓から出ていくのは慣れてる。

いつものようにスーツを着て窓から飛び出る。

会場まではスーツのまま向かえばいいかな。どこかに人気のない場所があるといいけど。

(いい感じの路地裏があつて助かった)

適当な路地裏でスーツを解除し、私服姿に戻るピーター。

ライブ会場へと続く道を歩きながら、財布の中を見る。

(良かった。ちゃんとある)

財布の中に入れたチケットを確認して、会場へと急ぐ。

(マリア・カデンツァヴァ・イヴ。綺麗な人だな。アメリカで活動中のトップアーティストらしいけど、世界を守りながらアーティストとしてもそんな人とコラボなんて、翼は凄いな)

二つの人生を同時に歩みながら、どちらも成功させている翼に感心するピーター。

(平凡な人生と、ヒーローとしての人生。その二つすら上手くやれなかった僕とは大違いだ)

本人はそう思っているが、理系の名門高校に通いながらヒーロー活動を行い、成績だ

けならM I Tへの入学も難しくなかったであろうピーターの人生は、とても平凡とはいえない。
い難い。

(まあとにかく、今日は仲間のもう一つの姿を素直に応援しよう)

少しネガティブになった感情を抑えながら、会場の受付係へと渡す。

(ペンライト……買った方が良いのかな?)

物販を見つけ、グッズなどを眺めるピーター。この姿を見て、彼が今ネットで噂のスパイダーマンだと気づくものはいないだろう。

(まあいつか。荷物が増えると何かあった時大変だろうし)

そう考え、会場内に入る。

(こうして見ると……よくチケット取れたなあ)

会場内は満席で、自分の席を探し当てるのも一苦労と言った様子だった。

豪華なセットのモニターにはQUEENS of MUSICと言う文字が映し出されている。

(Queens of Music。今回のライブのタイトルだけど、日本語だと歌姫って意味になるのかな? いや、こういうのはわざわざ訳さずに考えた方がいいのかな?)

日本語勉強中のピーターは最近、何かと英語で書かれたものを見つけてはこうして頭

の中で日本語に訳す癖がついてしまった。

(あ、始まる)

会場が暗くなり、伴奏が始まる。

最初の歌は「不死鳥のフランメ」、白を基調とした衣装のマリアと、対称的な黒と青の衣装の翼がステージに現れると、会場が歓声に包まれる。

「見せてもらおうわよ。戦場に冴える、抜身のアナタを」

(アレが、マリア・カデンツァヴナ・イヴ……。なんだろう……。この感じ)

登場したマリアに対して、スパイダーセンスとも違うおかしな違和感を覚えるピーター。

そんなピーターの違和感を置き去りにするように、不死鳥のフランメのタイトルを表すかの如く炎などを使った派手な演出が会場を熱気に包む。

(翼の歌、改めて聞くとやっぱり上手いな。普段は戦いながらだから聞き流しちゃってるけど、凄い迫力だ)

そして一曲目が終わり、翼のMCに入る。

「ありがとう！ 皆！ 私は、いつも皆からたくさん勇気を分けてもらっている。だから今日は、私の歌を聞いてくれる人達に少しでも勇気を分けてあげられたらと思うている」

翼の言葉に対し、会場の歓声が更に大きくなる。

「私の歌を全部、世界中にくれてあげる！ 振り返らない、全力疾走だ。ついてこれる奴だけついてこい！」

翼の言葉とは逆に、挑発的なマリアのMC。

「今日のライブに参加出来た事を感謝している。そしてこの大舞台上で、日本のトップアーティスト、風鳴翼とユニットを組み歌えた事を」

「私も、素晴らしいアーティストに巡り会えた事を、光栄に思う」

そう言つて、マリアへと手を差し出す翼。マリアがその手を取る。

「私達は世界に伝えていかなきゃね。歌には力があるつて事を」

盛り上がる会場とは逆に、その言葉を聞いた瞬間、

(なんだ……!?)

ピーターの感覚が明らかに過敏になったように耳鳴りが起きる。スパイダーセンスが反応しているのだ。ステージにいる、一人の女性に対して。

「そして」

「皆逃げて!!」

焦つて周りに知らせるピーターだが、会場の歓声にかき消されてしまう。

その瞬間、ステージの前へと大量のノイズが出現する。

歓声は悲鳴へと変わり、

「狼狽えるな!!」

マリアの言葉により静寂へと変わる。

(マズイ。これじゃあ、スーツを着れない。翼も中継がある以上ギアを出せない。せめて人混みに紛れてどこかに移動できたら……)

ピーターがどうにか外に出る方法が無いかと探っていると、再度マリアが口を開く。

「私たちは！ ノイズを操る力をもって、この星の全ての国家へ要求する！」

(世界相手に宣戦布告……？ どういうつもりで)

「そして！」

挑発的に笑い、マイクを投げ上げる。

「Granzizel bilfen gungnir zizzl」

(聖詠?! しかもアレは響の!)

マリアの服が弾け飛び、その身にギアが装着される。

その姿は、立花響のガングニールと同じものであった。

「黒い……ガングニール」

撃槍と蜘蛛

「我ら武装組織フィーネは、各国政府に対して要求する。そうだな、差し当っては、国土の割譲を求めよう！」

（完全にテロリストじゃないか……!? 全米の歌姫がどうして!?）

「もしも24時間以内にこちらの要求が果たされない場合は、各国の首都機能がノイズによつて不全となるだろう」

「どこまでが本気なのか……?」

「私は王道を敷き、私達が住まう楽土だ。素晴らしいと思わないか！」

そう問いかける翼に対し、マリアが答える。

「何を意図しての騙りか知らぬが……!」

「私が騙りだと?」

「そうだ! ガングニールのシンフォギアは、貴様のような輩に纏えぬものだと覚えろ!」

（こっちはこっちでマズイ! 通信! 通信!）

翼の様子に焦ったピーターが一部分だけスーツを展開し、小声で通信を行う。

「Imyuteus ameno『ストップストップ!』スパイダーマン……!?!」

『今は全世界に中継中だ! 君は有名なアーティストなんだから、正体がバレるのはマズイよ』

「だが、この状況では」

『僕が今急いで向かってる。君の歌は戦うためだけのものじゃないんだから、早まらないで』

「……分かった」

とは言ったものの、現状ピーターは会場から動ける状態ではない。

「確かめたらどう? 私の言ったことが騙りなのかどうか」

動きを止めた翼を挑発する。

しかし、ピーターの到着を信じる翼は、マリアを睨んだまま動かない。

「なら……会場のオーディエンス諸君を解放する! ノイズに手出しはさせない! 速やかに引き取り願おうか!」

「……何が狙いだ……!」

会場の人質を解放する事を宣言し、何かを企むように笑う。

(なんの企みかは分からないけど、とにかく急がないと)

開放される人質たちに混ざり、会場の裏方へと走るピーター。

(トイレ……いや、モニター裏の方が早い！)

出入りに困るトイレよりも、すぐにステージへと到着出来るモニター裏を目指して走るピーターだが

(緒川さんと、二人の女の子？ こっちはダメだ。とにかくどこか人目のつかない所に)

方向転換し、辺りを見回すとすぐ近くにドアを見つける。

(とりあえずここに！)

ドアにかかっていた鍵を壊し、中に入る。

「あー、後で翼に謝らないと」

そこは、強盗にでも入られたのかという程荒れた翼の控え室であった。

設置されている防犯カメラを殴り壊した後、ウェブシーターを操作し、スーツを装着した。

「ようやく出番開始って感じだ」

「帰る所があるというのは、羨ましいものだな」

誰もいなくなった会場のステージの上でマリアが呟く。

「マリア……貴様は一体……！」

「観客はみな退去した。もう被害者が出ることはない。それでも私と戦えないと言うなら、それはあなたの保身のため！ あなたは、その程度の覚悟しかできてないのかしら！」

そう言つて笑うと、剣状のマイクを翼に振りかざすが、

「いくら柄が長いからつてマイクをそういう使い方するのは歌手としてどうかと思うよ？」

それが翼に届く事はなく、何処からか伸びてきた蜘蛛糸に防がれる。

「来たわね、蜘蛛男」

蜘蛛糸の付いたマイクを投げ捨て、糸の伸びてきた方を見るマリア。

モニターの上から翼の前に青と赤を基調としたスーツに身を包んだ男が着地する。

「こめんね遅くなった」

「……全くだ」

ナノテクスーツを装着したスパイダーマンは一度翼に謝罪をすると、マリアの方へ向き直す。

「蜘蛛男っていうのはちよつと直訳すぎない？ 日本語が得意ならもう少しカッコイイ

訳し方をしてほしいな」

「仲良くお話をする気は無いわ」

「そう？　女の子はそういうの好きだと思ってたよ」

「そうしたいなら、まずその不快な仮装を剥ぎ取らせてもらおう！」

そう言うと、両腕のガントレットを結合し槍へと変化させる。

「はあっ!?　ガングニールってあんな事出来るの!？」

「本来のガングニールのアームドギアは槍だ！　来るぞー！」

想定外の出来事によそ見をするスパイダーマン。翼の言葉で咄嗟に回避行動を取る。コンマ数秒まで二人のいた位置に巨大な槍が振り下ろされる。

「それ僕の知り合いも似たやつ持ってるんだけど、彼女は素手で戦ってたよ！　うわあ!？」

空中で槍を奪い取ろうとウェブをつけるが、そのまま槍を振り回され、ステージへと叩きつけられる。

「その声とお喋り、癩に障る」

「けほっ……ごめんね。そういう性質たちなんだ……!？」

飛び起きながら、両足でマリアへと蹴りを入れる。

「翼！　とりあえず舞台袖に行つて!？」

「いきなり何を言って……!!? そうか!」

スパイダーマンの言葉の意図に気づき、舞台袖へと走る翼。それをさせまいと翼を追いかけようとするマリアの両手をウエブで拘束する。

「女の子の秘密を覗き見るのは良くないよ!」

「はあっ!!」

「ちよっ!?! マジい!?! わあああ!!」

引つ張っていた腕を下げられた事によりバランスを崩し、翼のいる方へ投げ飛ばされる。

舞台袖にたどり着く前に翼の背中に激突しもみくちやになりながら転がる。

「ご、ごめん……あの子力強いね」

「……分かったから手をどけろ……」

翼の言葉で自分の手元を見る。決してふくよかではないが、確かな膨らみの上にしつかりと置かれた自分の手。

「うわあ!?! ご、ごめんね! そういうつもりじゃないから!」

「……それは分かっている。状況を考えろ」

「そうだよ。とはいえあの子かなりの力持ちだし、これだけの大家族は一人じゃキツインだけど……」

辺りを見回すとステージ外ではノイズが待機している。ノイズだけ、またはマリアだけならどうとでもなるが、この状況を翼の助力なしで乗り越えるのは至難だろう。

「それは分かっている！ 何度もよそ見をするな、来るぞ！」

「はいはい。分かっていますよっ」

スパイダーマンのいた位置をマリアの槍が振り抜く。スパイダーセンスで感知し宙返りで躲すが、マリアが振り向くと同時に翻ったマントが迫る。

(マントで目くらまし……いや違う!?)

目くらましと判断し振り払おうとした腕を咄嗟に引き、背中のアームでガードする。

すると、金属同士がぶつかり合ったかのように火花が散る。そのまま腕で止めていればバターののように容易に切断されていただろう。

「うわあ……それそんな使い方できるんだ」

「あなたの手品はそれで終わりかしら」

焦ってガードしたピーターのアームを見ながら挑発するマリア。

「さあどうだろう。もしかしたら巨大ロボでも召喚するかも」

「くだらない戯言ね。どうすればその耳障りなお喋りが止まるかしら」

「君が素直に捕まってくれたら黙るかもね」

「それは残念。ならば実力で黙らさせてもらう！」

先程のように身体を捻りマントを翻し攻撃を行う。

「ちよつと前に流行つてたよねねそんな感じの回るおもちや。ベイブレードだっけ？」

四本のアームで迎撃しつつ発せられるお喋りが止める気配はない。無駄話というわけではなく、翼から意識をそらす為と、歌を歌わせないための策である。しかし、そんなことに気づかない程マリアも馬鹿ではない。ピーターと戦闘を行いつつも、隙あらば舞台袖に走り出しかねない翼をしっかりと捉えている。

「せつかく話してるのに無視は寂しいな！」

マントの斬撃を止めつつ、むき出しの顔に向かってウェブを放つ。目潰しにでもなればと放つたものだが、直前でマントによって弾かれる。

「その便利マントは名前とかあるの？ ドクターのマントにはあつた気がするけど」

「どうかしらね。聞いてみればいいんじゃない？」

「つれないね。でもこれを聞いたら少しは興味持つんじゃない？ 中継が切れたよ」

「何!？」

スパイダーマンの言葉に、中継映像が映っていたモニターを見上げるマリア。そこには先程までの中継映像ではなく、黒い画面に「NO SIGNAL」の文字が表示されていた。

「うちの忍者が上手いことやってくれたみたいだね」

「くっ……！」

聖詠を行おうとペンダントを握る翼の元へ走ろうとするが、片足をウェブでステージに貼り付けられ動きを止められる。

「ダメだよ。人の歌を邪魔しちゃ」

「Imyuteus amenohabakiritron」

歌が終わり、翼のギアが装着される。

「翼！ まずは観客席のノイズを！」

「ああ！」

——蒼ノ一閃——

スパイダーマンの声に答えると同時にステージから飛び降り、その巨大な剣が観客席のノイズ達へ振り下ろす。

——逆羅刹——

そのまま手を地につき、天地を逆さに回りながら足のブレードでノイズ達を切り裂いていく。

——千ノ落涙——

そして最後に、空中に大量に出現させた剣が観客席へ降り注ぐ。

「ああいうのは彼女の方が適任だね。ところでなにか焦つてたりする?」

貼り付けられたウェブを無理やり引きちぎったマリアの槍がスパイダーマンに迫るが、不意打ち気味だった先程までとは違い、余裕を持って回避を行い、空いた腹部へとキックを入れる。

「くっ……!」

ギアを装着している事と、スパイダーマンが加減して放った一撃である事を差し引いても、かなりの威力で放たれたそれに後退りするマリア。

お互いの距離が空いたタイミングで、ステージにいるスパイダーマンの隣に戻ってくる翼。

「あの GANG ニール。やっぱり本物かな」

「そうだな。少なくとも偽物には見えなかった」

「ようやくお墨を付けてもらった。そう、これが私の GANG ニール。何者をも貫き通す

無双の一振りッ！」

三重奏と蜘蛛

「はあっ！」

翼の剣とマリアの槍が鏝迫り合う。剣を弾き上げ、マントで追撃をしようとした所をウェブによって阻まれる。

「やっぱりさつきから焦り気味だね。気が散ってるよ」

「くっ！」

「二対一で気を取られるとは！」

動揺した様子のマリアのマントをウェブで引っ張り体勢を崩させる。

「話はベッドで聞かせてもらおう！」

—— 風林火斬 ——

ギアの脚部から取り出した二本の剣を連結させ回転させながら、体勢を崩したマリアへと迫る。が、しかし、その剣がマリアを切り裂くことはなかった。

— α式 百輪廻 —

— 切・呪りeTTオ

二人の乱入者の歌に反応し、咄嗟にスパイダーマンが翼を引き寄せ回避させる。先程まで翼のいた場所には丸ノコギリのような大量の円盤と、鎌状の巨大な刃が二つ刺さっていた。

「……危機一髪」

「まさに、間一髪だったデスよ！」

「あー、人数有利が早々に覆されちゃったみたい」

「それはどうだろうな。装者が、三人か」

三人の装者が並ぶ。一人は桃色のツインテールが目立つギア、もう一人は緑色の巨大な鎌が特徴のギア。

「調と切歌に救われなくても、あなた達程度に遅れを取る私ではないんだけどね」

「貴様みたいなのはそうやって、見下ろしてばかりいるから勝機を見落とす！」

「っ！ 上か!？」

「土砂降りの！ 十億連発！」

—BILLION MAIDEN—

上空から降りてきたクリスのガトリングによる掃射で、五人の位置がバラける。

そして唯一その場から動かず、マントを固めガードしたマリアに響の拳が迫る。回避を前提とした大振りのパンチ。反撃を行おうとしたマリアの攻撃を避け、スパイダーマシンの翼が着地した柵の前に降りる。

「やめようよこんな戦い！ 今日出会ったばかりの私達が争う理由なんてないよ！」

振り返り三人に向かって叫ぶ響。

「そんな綺麗事を……！」

「綺麗事で戦うヤツの言う事なんて、信じられるものかデス！」

だが、その言葉が彼女達に響く様子はない。

「そんな……。話せば分かり合えるよ！ 戦う必要なんか」

「偽善者」

「え……？」

響の言葉を遮るように放たれた言葉に動揺する。

「この世界には、あなたのような偽善者が多すぎる!」

だからそんな世界は切り刻んであげましょう、そう歌いながら攻撃を開始する桃色のギアの少女。

回避の遅れた響をウェブで引き寄せキャッチするスパイダーマン。その後ろからクリスのガトリングが火を噴く。

「話し合いはまだ出来そうにないよ。まずは彼女達を止めないと」

響を降ろすと、銃弾を回避し散開した緑のギアの少女の方へ向かうスパイダーマン。

「くっ! 近すぎんだよ!」

銃弾を防ぎながら大鎌で仕掛ける少女の攻撃を回避し、空中へ飛び上がったクリス。

その真下から少女の鎌の柄にウェブを貼り付け、動きを止めるスパイダーマン。

「僕達は話がしたいだけなんですけど。聞く耳持たずって感じだね!」

「綺麗事だけのお喋りに付き合ってる暇は無いのデス!」

スパイダーマンの言葉は「綺麗事」と

「私は、困ってる皆を助けたいだけで……だから!」

「それこそが偽善……!」

響の思いは「偽善」であると、切り捨てられてしまう。

「痛みを知らないあなたに……! 『誰かのために』なんて言ってほしくない!」

——γ式 卍火車——

二つの巨大な丸ノコギリが響に迫る。

「こんな状況でよそ見しない！」

「は、はい！」

それを間に入ったスパイダーマンが四本のアームで弾き飛ばし、響を叱咤する。

「よ、よそ見をしてたわけでは」

「精神的なよそ見だよ」

スパイダーマンの言う通り、直前まで響は心ここにあらずと言った状態で、見えてくるノコギリをガードも回避もしようとしていなかった。

「す、すみません」

「いいから、あの子たちを止めたいんなら」

そこまで言いかけた所で、ステージの上で緑色の光が爆発する。そして、その光の中から巨大なノイズが出現する。

「うわあ………何？ あのでっかいイボイボ……」

「ホント毎回悪趣味な見た目……」

唾然とするスパイダーマンと響。

「増殖分裂タイプ……」

「あんなの使うなんて聞いてないデスよ！」

少女達にとってもこのノイズの出現は想定外だったようで、明らかに戸惑っていた。

「……わかったわ」

そんな中、マリアは小さく呟くと、ノイズに向かって持っていた槍を構える。

——HORIZON†SPEAR——

槍の先端部分から溜め込まれた光がビーム状になって発射される。

「おいおい!? 自分らで出したノイズだろ!?!」

ビームを受け肉片をばら撒きながら崩壊するノイズを背に会場から逃げ出す三人。

「ここで撤退だど!?!」

「せつかく温まってきたのに尻尾を巻くのかよ!」

「皆こつち見てノイズが!」

スパイダーマンの言葉に反応し飛び散ったノイズの肉片を見る装者達。蠢くそれは、新たなノイズを形作り始めていた。それをさせまいとした翼の剣によって、一度は切り

裂かれるが、その肉片が新たなノイズとなる。

「コイツの特性は、増殖分裂」

「放っておいたら、際限ないってわけか。そのうちここから溢れ出すぞ……!」

「この量を一気に片付けなきゃいけないってこと?!」

翼とクリスの言葉に目を見開くスパイダーマン。すると四人に通信が入る。

『皆さん聞こえますか! 会場のすぐ外には、避難したばかりの観客達がいま! そのノイズをここから出すわけには』

「観客?!」

「まあそうだよね。誰かでつかいビームとか出せない?」

「そんな便利機能ついてたらはなから使ってる!」

「しかし、生半可な攻撃では、いたずらに増殖と分裂を促進させるだけ」

頭を抱える三人に、響が提案をする。

「絶唱……絶唱です!」

「それって、シンフォギアについての決戦機能ってやつ?」

「でもあのコンビネーションはまだ未完成なんだぞ?!」

「……増殖を上回る速度での殲滅には、それしかない。スパイダーマン。貴様も離れていろ」

「おっけー。身体の負担とかは大丈夫なんだよね？」

「はい！ 任せてください」

二人と顔を見合わせ手を繋ぐ響を背に、ウェブを使い会場から離れるスパイダーマン。

その後ろから、三人の歌が聞こえる。

——G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n a l——

会場の中から巨大な虹色の光が漏れ出す。

『S2CAトライバースト』三人の絶唱を響が調律し、一つのハーモニーとする事で、威力の増大及びパートナーにかかるバックファイアの軽減を可能としたコンビネーション。

「アレが、絶唱」

「これが私達の！ 絶唱だああ!!」

響のアームドギアから放たれた衝撃波は空を切り裂き、会場のノイズをまとめて殲滅した。

力と責任と

S2CAの発動により、ノイズを殲滅した響。

だが、ギアを解除した彼女はその場に座り込んでしまい動こうとしない。

「無事か！ 立花！」

「やっぱり負荷が大きかったとか!?」

ギアを解除した翼とクリス、会場に戻ってきたスパイダーマンが彼女に駆け寄る。

「へいき……へっちゃらです」

いつものようにそういう彼女の目には涙が浮かんでいる。

「へっちゃらなもんか！ 痛むのか!? まさか……絶唱の負荷を中和しきれなくて

……」

そう言いかけたところで否定するように首を振る響。

「私のおしてることって……偽善なのかなって……。胸が痛くなることだって……知って

るのに……！」

嗚咽しながら言葉を零す響。桃色の少女から言われた『偽善者』という言葉が、彼女

の心に重くのしかかっていた。

約一週間後

ここは響達の通う私立リディアン音楽院高等科。その屋上に、見慣れた女子生徒を発見し着地する、何故かナノテクスーツを着たままのピーター。

「やあ、響。授業中から心ここにあらずって感じだったけど、何か悩み事？」

「スパイダーマンさん……来てくださいとは頼みましたけど、授業中から覗いてたんですか……？　ここ一応女子校ですよ？」

一歩間違えれば捕まりかねないピーターの行動にドン引きする響。

「い、いや違うよ!!　なんだか切羽詰まった感じで電話かけてきたし急ぎなのかなって見てただけだよ！」

必死に手を振りながら弁明をするピーターを見て、クスリと笑う。

「でも、ありがとうございます。わざわざ来てくれて」

「気にしないでいいよ。それで？　肝心のお悩み相談の内容っていうのは？」

「はい。この前のことなんですけど……翼さんのライブの日、あの子に偽善だつて言われてから、その言葉が頭から離れなくて……自分のしてた事が正しいのか分からなくなっちゃって。たくさんの人を助けてたっていうスパイダーマンさんなら、どうすれば

いいかわかるかなって……」

ベンチに座りポツリポツリと言葉を零す響の話聞きながら、腕を組み、少し考えるピーター。

「……僕が最初にこの活動を始めて少ししてから、ある人に聞かれたんだ、何故こんなことをしてるのかって。その時は、ただ漠然と困ってる人を助けたいって気持ちだけだったんだ。自分から出来ることがあるのにやらなかったら、それで悪い事が起きたら、自分のせいだと思うから」

「私も、そうだったんです。困ってる人を、ただ助けたかった」

「そっか。でも、その後、困ってる人は良い人だけじゃないんだって分かる事があってその時に……叔母さんが殺された……」

「叔母さんって……たった一人の家族って前に言ってた」

「そう。その叔母さん。その時、それでも叔母さんは僕達は正しいと言い続けてた。僕たちのやつってる事は偽善かもしれないし、綺麗事かもしれない」

「やつぱり……」

「でもね、きつとそれで良いんだと思う。偽善も、綺麗事も、現実には出来るならそれが一番いいんだ。力を持った僕達には、それが出来るかもしれない。なら、やらないわけにはいかないんだよ」

「やらないわけには？」

「With great power comes great responsibility……あー、日本語で言うなら、大いなる力には大いなる責任が伴う。つて感じかな」

「大いなる力には大いなる責任が伴う……」

ピーターの言葉を噛み締めるように復唱する響。

「でも君はいい子だ。だから今はやりたいと思う事を、精一杯やればいいんじゃないかな」

「……言ってること、何となくわかった気がします。でもそれで間違った事をしちやつてたら」

「それを止めるのが、僕たち大人のやるべき事だ。だから大丈夫、君はそのままでもいいんだよ」

「……そつか。なら私、自分のやりたいこと精一杯やってみます！ ありがとうございましたー」

「いいよ。それじゃあ僕はちよつと行く所があるから、またね」

普段通りの元気を取り戻した響を背に屋上から飛び降りるピーター。

（あんな力を持ってても、まだ子供なんだ。年長者として、僕が支えないと）

今までは自分よりも年上のヒーローが多く、支えられる立場にあったピーターだが、今一緒に戦っているのは自分がヒーロー活動を始めた時と同じ年の女子高生である。その事を改めて認識したピーター。

(少し寄り道しちやっただけど、急ごう。確か緒川さんが言ってた町はずれの病院つてのはここからそんなに遠くないはず)

決意を固め、先日の武装集団が根城としてる可能性のある病院へと向かう。

終焉の名を持つもの

日付が変わった12時過ぎ。

深夜とも言える時間に、三人の装者とスパイダーマンは町外れの廃病院の前にいた。

『いいか！ 今夜中に終わらせるつもりで行くぞ！』

『明日も学校があるのに夜半の出勤を強いてしまい、すみません』

「気にしないでください。これが私達、防人の勤めです」

「街のすぐ外れにあの子達が潜んでいたなんて」

『ここはずっと昔に閉鎖された病院なんです、二ヶ月前から物資が搬入されているみたいなんです。昼にスパイダーマンさんに調査してもらったんですが……』

「水道やシャワーなんかも使った後があつたから、多分ここにいたのは間違いないと思うよ」

「じゃ、シャワーってお前!? アイツらがいたらどうする気だつたんだよ!」

一通り中を探索したスパイダーマンが答える。その言葉に顔を赤くしながら動揺するクリス。

「い、いやそんな邪な気持ちがあつて覗いたわけじゃないよ!? ただ、人がいたかの確認には一番適切かと思っただけで! そもそも彼女達は敵なんだからいたらいたでラツキー! くらいにしか!」

「ラツキーつてお前……! 完全にそういう考えで覗いてるじゃねえか!」

「いやラツキーつてそういう意味じゃなくてえーつとほら! 早く事態が収束するならラツキーつて意味で!」

三人からジト目で睨まれ、慌てて手を振りながら否定する。反論すればするほど疑いの目は大きくなるのだが、必死に弁明する彼にそんな事を考える余裕はない。

『とにかく、スパイダーマンさんのおかげで先日まで人がいた事は確定しましたから!』

「ま、まあ、そこまで分かつてんなら後はしつぽを引きずり出してやるだけだ!」

「そうだな。スパイダーマン、話は後で聞かせてもらおう!」

何とも言えない気分になりながら、走り出す二人を追いかける響とスパイダーマン。

「昼もそうでしたけど……スパイダーマンさんつて年下の女の子が好きとかそういう趣味ですか?」

「ち、違うよ!? そもそも僕はまだ18歳だからそこまで年は離れてないよ!」

「18歳!!」

「アレ言つてなかったっけ?」

「聞いてませんよ！　もつと年上なものかと……」

「こつちに来る前に高校を卒業したばかりだったからね。まあでも、そう？　僕って大人っぽく見える？」

「いえ、そう言われると割と納得できます」

「あ、そう……」

スーツを着て接することしか無く、判断材料が声と話の内容程度しかないので響は勘違いしていたが、そもそも彼の振る舞いや声などはどちらかと言えば幼い方だ。

「にしても、十五歳の時からヒーローになったって聞きましたけど、三年で色々ありすぎじゃないですかね……」

「うん。それは僕が一番思ってる」

「集中しろ二人とも」

病院の中に入りながらも無駄話を続ける響とスパイダーマンを翼が一喝する。

その視線の先には、通路の奥からこちらに向かってくる大量のノイズ。

「Killter ichhiival tron——」

聖詠を歌い、先陣を切るクリス。

——BILLION MAIDEN——

両手に構えたガトリングを掃射するクリス。その隣に、ギアを装着した翼と響が並ぶ。

「やっぱり！ このノイズは……！」

「ああ、間違いなく制御されている」

「つまり、この近くに操縦者がいるってわけだね」

スパイダーマンの言葉を皮切りに、四人が走り出す。

「立花！ スパイダーマン！ 雪音のカバーだ！ 懐に潜り込ませるな！」

「おっけー。誤射しないでよっと」

先行したクリスと、その後ろを走っていた三人が散開する。

各々が拳、剣、銃弾で順調にノイズ達を炭化させていったはずだった。

「えっ!？」

砕かれたはずのノイズが復活する。切り裂いても、砕いても、焼き払っても、まるで効いていないかのように復活する。

しかし、それはギアを纏った三人による攻撃を喰らったノイズのみで、スパイダーマンが殴り砕いたノイズ達はそのまま炭化し、消滅している。

「なんで……！ こんなに手間取るんだ！」

息を切らしながら辺りを見回すクリス。スパイダーマンが撃破してはいるものの、広範囲攻撃の無い彼一人で減らせる量は多くない。

「息が荒いよ。大丈夫？」

「ギアの出力が落ちている……！」

「え!!? それってまずいんじゃないの!!？」

「ああ……このままでは」

「待って! なにか来る!」

近くにいた三人を庇うように前に出て、襲撃してきた謎の生物を殴り飛ばすスパイダーマン。

「何あれエイリアン!？」

天井の配管を蹴って再度、スパイダーマンに向かって飛びかかるエイリアンもどき。それを前に出た翼が迎撃するが

「アームドギアで迎撃したんだぞ!？」

「なのに何故炭素と砕けない!」

それが炭化することは無く、離れた位置で身構えていた。

「まさか、ノイズじゃ……ない?」

「じゃああの化け物はなんなのさ!？」

その時、拍手の音と共に、暗闇から一つの人影が現れる。

「えっ!？」

「ウエル博士!？」

彼女達が護衛を行い、その後ソロモンの杖と共に行方不明となっていたウエル博士がそこにいた。

「そんな。博士は岩国基地が襲われた時に……」

「つまり、ノイズの襲撃は全部……!？」

先程の化け物をケージの中へ入れると、答え合わせでもするかのように語り出す。

「意外に聡いじゃないですか。明かしてしまえば単純な仕掛けです。あの時既に、既にアタッシュケースの中にソロモンの杖はなく、コートの内側にて隠し持っていたんですよ」

「ソロモンの杖を奪うために、ノイズを制御し自分自身を襲わせたのか!？」

「バビロニアの宝物庫よりノイズを召喚し、その制御を可能にするなどの杖を置いて他にありません。そして、その杖の所有者は今やこの自分こそが相応しい! そうは思いませんか?」

「それはどうだろうね!？」

ソロモンの杖に向かいウェブを発射するが、直前で現れたノイズによって防がれる。

「ダメエツ！」

「っ!? クリス！ それはダメだ！」

ウエル博士に向かってミサイルを発射しようとするクリスを制止しようとするが、止まらない。

「がっ……!!? あああああああ!!」

この時スパイダーマンは、この時二つの事を危惧していた。一つは、クリスによってウエル博士が殺されること。こちらは彼がノイズで攻撃を防いだ事により回避された。もう一つは、適合係数が下がった状態での大技によるギアのバックファイア。

クリスがダメエツを受けた事で、自滅を狙ったウエル博士の策にハマった事になる。バックファイアに苦しむクリスを抱えている間にウエル博士はノイズを使い崩壊した病院から脱出していた。

「クソっ……!! なんてこっちがズタボロなんだよ！」

クリスを抱えながら外に出ると、そこにいるウエル博士の手から先程まで持っていたケージが消えていた。

「アレは！ ノイズがさっきのケージを持って！」

「このままじゃ海の方に逃げられる！」

響とスパイダーマンの言葉通り、飛行型のノイズが先程までの化け物を収納したケ―

ジを吊り下げながら、洋上へと向かっていた。

「響！ そいつを捕まえておいて！ あとクリスの事もお願い！ 翼！」

「ああ！」

声をかけると同時に二人は海の方へ伸びた崩落した橋に向かって走り出す。

「策はあるのか！」

「一応ね！ あとはちよつと足場があると助かるんだけど……」

『そのまま跳べ！ 翼！ スパイダーマン！』

足りない1ピースを埋めるように通信機へと声が響く。

その声を聞き、勢いよく海に向かって翔ける。

飛距離が足りず落下するが、その瞬間、海の中から巨大な潜水艦が浮上する。それを足場に二人がもう一度飛び上がる。

そして、スラスターを噴かす翼の足にウェブを貼り付けるスパイダーマン。

「ハアツ！」

スラスターで勢いを乗せ脚を大きく振る翼。ウェブに捕まったスパイダーマンが振り子の要領でノイズの方へと飛ばされる。

「だああっ!!」

その勢いのまま全力でノイズにパンチを入れる。そして、ノイズが砕け散った事によ

り落下していくケージにウエブを飛ばし手繰り寄せる。

「よしっ！ あとちよつと！」

あと少しでケージに手が届くと言うところでスパイダーセンスが反応し、咄嗟に身体を逸らす。

唐突に現れた槍はウエブを切断し、水面で停止する。そのまま手を伸ばしていれば腕ごと切断されていただろう。

「やばっ！」

「糸を飛ばせ！ スパイダーマン！」

槍に邪魔されバランスを崩した体をひねり声のした方へウエブを飛ばす。それを潜水艦の甲板に着地していた翼が掴み力強く引き寄せる。引つ張られたウエブに引き寄せられる形で翼の方へ飛んできたスパイダーマンを片腕でキャッチする。

「ナイスキャッチ……またあの子か……」

「とりあえず降りろ……」

「ああ、ごめんね」

夜明けの太陽を背に、水面に浮かぶ槍の上に立つマリアに視線を向ける二人。

「時間通りですよ。フィーネ」

ウエル博士が響に後ろ手で拘束されながら彼女に呼びかける。

「フィーネだと……!?!」

「終わりを意味する名は、我々組織の象徴であり、彼女の二つ名でもある」

「まさか……じゃあ、あの人が……!?!」

「新たに目覚めし、再誕したフィーネです」